みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

展示設計のあたらしい視点

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福島, 正和 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002184

第5章
展示設計のあたらしい視点

福島　正和

1. はじめに

国立民族学博物館の開館後から博物館建設ブームともいえる現象が起こり、展示設計者の業務領域が拡大し、役割も変化していった。ここではその状況下の新しいタイプの博物館・文化施設での展示設計者の具体的な作業を取り上げ、今後の博物館事業と展示設計者の関わりについて考察をする。

2. 展示施設の変化と設計業務の変化

国立民族学博物館以後の展示設計業務内容を紹介するために、まず博物館・文化施設づくりを設立主体、目的、展示物等観点から大きく区分する。なお、この区分は統計的な研究成果に基づく厳密なものでないが、次章で設計業務を具体的にイメージする為にあえて行ったと考えていただきたい。

従来型の資料中心の博物館での展示設計者の関わり

自治体の教育委員会が設立主体で、準備室があり専属の学芸員が在籍している従来型の博物館では展示資料をかなり収集している場合が多い。このような博物館建設事業で展示設計者は、収集資料がある程度整理された段階で参画する。また建築設計者もほぼ同じような時期に参画し、施設全体の検討も始る。具体的な業務は、館の設立方針や施設設備等の与件の確認し、展示のコンセプトを検討することから開始される。

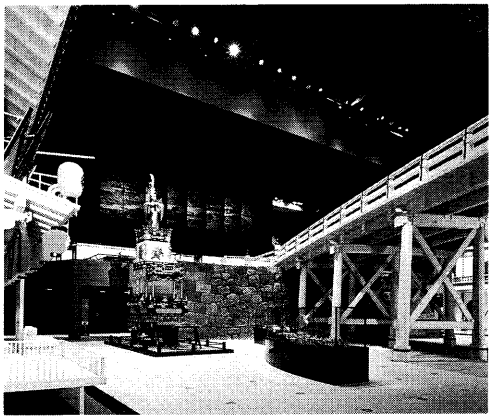
また収集資料の実測確認をしながら、展示構成と展示資料を定めていく。それらの進行に合わせて展示手法の開発や展示物の配置、展示装置等の詳細設計が行われる。

大分県立歴史博物館

実物資料の比率が少ない博物館での展示設計者の関わり

地域文化の研究がある程度蓄積されているが、展示で一般へ公開するのに十分な実物資料を持たない博物館、たとえば収集資料が考古出土物であったり、空襲や自然災害で文化財が失われてしまった地域の博物館建設では、建設事業の初期の段階で展示設計者が参画し、実物資料の弱さを展示技法で補うことがある。たとえば、資料の不足を補うために展示の構成を提案しながら、関連するレプリカ資料の候補をあげたり、収集した実物資料をわかり易く説明するために、模型、映像などの新しい展示手法の開発を行なう。事業主体は教育委員会でなく、首長直轄の企画部のときもあり、専属の学芸員の参画時期は当初や途中など様々である。

斎宮歴史博物館



江戸東京博物館

広報施設や観光施設での展示設計者の関わり

自治体が地域の文化や自然の資産を一般へ紹介する広報施設や観光施設の建設ではほとんど実物資料を持たず、また、展示で紹介する事柄に対してまとまった研究の蓄積が無い場合が多い。このような施設の建設は、首長のリードで開始され、その段階で展示設計者が参画し、展示部門が「目玉」になるので、建築や運営、資料収集等も含めた総合的な施設計画の立案を展示設計者が主体となって行う。その後計画から設計、製作・工事へとプロジェクトが進行するに従い、建築設計、運営コンサル、建設会社、等の専門家へと業務が引き継がれていく。

参宮歴史館おかげ座

深川江戸資料館

展示更新における展示設計者の関わり

博物館・文化施設の建設が各地に行き渡り、近年は老朽化した施設の更新（リニュアル）業務が現れ始めている。

新設事業と大きく異なるのは、館側に施設運営の実績が蓄積されていることである。なかでも来観者の館内や展示場での動向、施設や装置などのハード面での使い勝手については開館時に参画した展示設計者よりも熟知している場合がある。このような状況で展示設計者はより新しいノウハウを提供し、また内部からとは異なる客観的な視点で取り組まねばならない。

さらに展示更新では来観者の参加体験性や地域住民への意識が重視されはじめており、これについては対応方法の確立が迫られている。

3. 新しいタイプの文化施設づくりでの展示設計の視点、業務

前項で整理したように、従来型の博物館では学芸員によって研究や資料の収集がある程度進められおり、展示設計者が参画した時点で、主要な展示方針、資料カードやリストなどの展示物に関する情報、デザインの参考になる研究成果などを与えられてから設計作業が開始される。

ところが最近の文化施設づくりでは設立主体者側に学芸員が存在せず、資料や研究の蓄積がない状況から展示設計者の参画を求められるので、設計の与件は大まかな方針しかないことが多い。極端な場合、「この地域にふさわしい文化施設を作ってくれ」というものもある。

このような状況にある基本構想、基本計画では、展示設計者が展示設計の領域を越えて、建築設計方針や資料収集方針、運営方針等各分野の企画も行い、のちに各分野の専門家へ引き継いでいただくようにする。ここでは新いタイプの博物館・文化施設づくりで、特に基本構想、基本計画段階での展示設計者の業務について順を追って述べていく。

基本構想段階での業務 地域資産の見直し、テーマの検討

①地域の文化資産の調査

展示資料がほとんど無いので、まず展示として見せる資料や素材の情報収集や、展示としてふさわしい事象の調査を始める。

具体的にはまずその地域に関する研究成果の収集、既存施設の視察、現地フィールドの視察等によって情報収集を行う。

研究成果の収集では教育機関が発行した地域史や文化財の調査報告書、近隣博物館の研究紀要等の他に、地域出版社の教材や同人誌、ときには一般向けのガイドブックや自治体の観光案内のパンフレットまで参考にする。

既存施設は当該自治体だけでなく周辺や県立レベルなどエリアを広げ、施設の種類も博物館・文化施設からテーマによっては商業施設、私立・個人レベルのものもあたる。ただし、事業としては初期段階であるから、深さより広く浅い情報収集になる。

また、現地フィールドの調査対象は当地の有力な観光・文化資産の視察の他、駅や行政拠点など施設の立地条件に関わるものも含めている。

② 有識者へのヒヤリングとブレスト

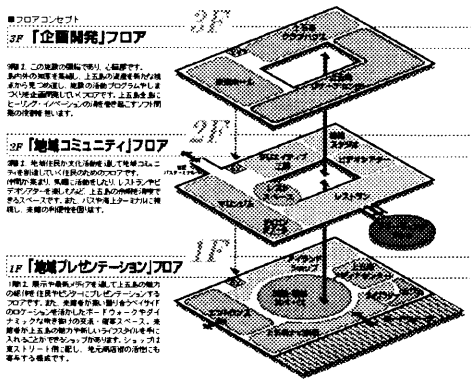
上記で収集した情報は、一般的なことが多く、それだけでは新しい施設として斬新なテーマを引き出したり、具体的な展示物を確定させることは出来ない。そこで施設のテーマに関わる専門研究者や地域で活躍されている研究者や文化人などの有識者の方々にヒヤリング調査を行い詳細な最新情報を収集する。またブレーンストーミングも実施して具体化の方向や問題点の検討もする。また、それらの方々の中から以後の事業の進行に従って、個別の展示内容の監修や運営へのアドバイスなどへも参画して頂くこともある。

③ 施主との調整

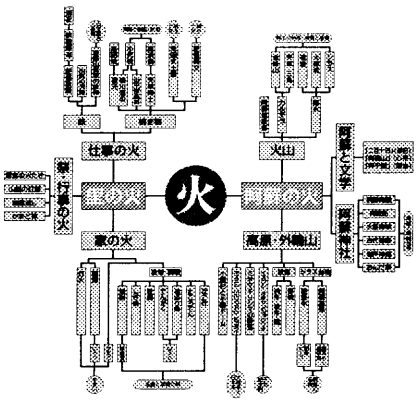
収集した情報と有識者との検討をもとに事業主体者と協議して、展示の基本方針、展示のテーマ、展示として扱う素材、主要な展示物等が決定される。

事業主体者も専門家ではないので、収集した情報を読み取りやすいものに編集加工して、プレゼンテーションや打ち合せを行う。

また、企画を理解しやすいようにラフな施設イメージを作成しスケッチやゾーニング図で提案することもある。しかしこのような具体的な事項の検討に話題をとらわれ過ぎるとイメージが固定化されてしまい、建設用地や建築設計の段階で大きく制約を受けたときに柔軟で的確な対応ができなくなる。この段階ではコンセプチュアルな検討を重視している。



施設ゾーニング図の例



展示素材のプレゼン例

「基本計画」における展示技法の具体化と施設イメージの検討

① 主要展示技法の検討

基本構想の方針に沿いながら、主要な展示技法や大きな展示物の配置構成を企画検討する基本計画の作成を行う。

展示技法の検討では実物やレプリカなどの資料性を重視するか、映像や模型など演出性の高いものにするかの選択に重点が置かれることが多い。新しいタイプの文化施設は従来型の博物館のような実物資料へのこだわりは少ないので、資料性と演出性の優劣はあまりなく来観者にとって印象が強く見やすいものが優先されることが多い。実物資料では印象が強いもの、映像ではテーマがわかり易いもの、模型で

は情緒性の高いのが好まれる。規模の大きな施設では、さまざまな展示手法を取りながら、変化に富み来観者を飽きさせないようにする。

またこの段階で基本的な展示空間の配置構成を行うため、主要な展示資料の実物やレプリカで大きな物や数量のあるものについては、収集決定前でもそれを実際見て計測する調査を行っている。これはその後の詳細設計段階で空間に制約が出来た場合でも、その展示資料を効果的に展示する方法を提案できるようにするためである。

② 全体施設計画の検討

展示空間構成が具体化した段階で施設全体の検討を行う。この段階で必要な施設計画は基本構想に相当するものなので、特に建築設計者を置かず、展示設計スタッフの中に建築に対応できる人材を置き、管理運営計画の骨子も合わせて検討し大まかな施設の具体的なイメージを作りあげていく。後に正式な建築設計者へその構想レベルの施設イメージを与件として提示し、基本計画から設計へと進めてもらう。

③ 運営計画の検討

近年文化施設の利用を促進するために展示では観覧させるだけでなく、来観者も実験を行ったり、ワークショップを開催して工作を行うように体験性が強く求められている。

また地域の文化事業ではその地域の人々が文化施設づくりや開館後の活動に主体的に取り組むようになって来た。

また既存館のリニュアルにおいては上記の傾向は一層強い。

このため、展示計画の作成では、博物館・文化施設での運営活動の経験者をスタッフとして参画させ、新しい展示物や展示手法の企画検討を行っている。また地域の文化活動の経験者を参画させ、その地域内の様々な施設あるいは文化活動を行っている組織団体の役割や活動状況を調査し、それらと連携して展開できる事業活動の企画を提案している。

さらに以上のような体験性、参加性の効果の検証や地域への気運を盛り上げるために地域の一般住民を対象にイベントを行うこともある。

アンパンマンメッセ'97

いしかわチャイルドアカデミー

4. 現在の展示設計活動の問題点と課題

以上のように近年の展示設計の活動を概括したが、その特質と問題点をまとめると以下のようになる

展示設計スタッフの人材と問題点

国立民族学博物館建設での展示設計者の主たる役割は展示空間、展示具等のデザイン業務であった。しかしその後の博物館・文化施設作りでは学芸員や運営担当者の業務を先行する必要が出てきたので展示設計スタッフの中にその業務推進が可能な人材を置いて対応している。

しかし施設完成が近づき、館組織内に正式な担当職員が採用され、計画の具現化が引き継がれるが、様々な理由で展示設計者が企画立案してきたものを上手に引き継げないという問題が発生する場合がある。

この解決には事業主体者との初期の段階での調整を重視し、早い段階で館内正式職員の参画を進めて頂くことが第一である。また展示設計者側も更なるノウハウの蓄積を行い、引継ぎやすい精度の高い企画提案を行う必要がある。

トップダウンの事業推進から現場主体の事業推進へ

これまでの文化施設の事業推進は自治体の首長や担当部局であり企画、設計の検討・調整はそれらの方々と進めるトップダウン方式であった。ところが今後の施設作りへの地域住民の関心の高まり、リニュアル物件の増加、参加体験性の要求等の

対応には館内の第一線、地域の人々等の現場からの企画発想も取り込むことが必要になる。このため展示設計者も現場サイドのニーズを知り現実化したり、効果を検証していく業務推進の方法を確立しなければならない。